1885
英吉利法律学校が開校

英米法を基にする法体系構築をめざし、増島六一郎らにより英吉利法律学校が開校した。校舎は東京府神田区錦町。1887年には煉瓦造りルネサンス式の新校舎の一部が竣工。学生数は急激に増え同年10月には665名となる。設立の背景には法整備の急務があった。当時日本には民法がなく、欧米列強はその未整備により治外法権の撤廃に応じなかった。そのため官学2校とともに私学の法律学校*も創立され、法整備と法曹の育成が図られようとした。

*五大法律学校……英吉利法律学校・東京専門学校(早大)・東京法学校(法政大)・専修学校(専修大)・明治法律学校(明大)

1890
花井卓蔵　法曹界最年少で代言人試験合格

刑事裁判の弁護で名声を博し「花の弁論」と謳われた。「足尾鉱毒事件」などを手がけるが、生涯1万件に及ぶ弁護の多くは名もなき民の窮状を救うものだった。私学出身者として、初の法学博士でもある。

1891
発展期を支えた　菊池武夫

増島六一郎から東京法学院を引き継ぎ第2代院長となり、21年間にわたって、東京法学院、東京法学院大学、中央大学の院長および学長を務め、その発展に寄与した。1889年民法典論争が起こり、菊池らの尽力で英米法の影響は民法に残った*。

*民法典論争によって、民法に仏法だけでなく英米法の影響も残った。これらの論争により旧法律は、一国の法の強い影響というよりは、英・仏・独他の各法が比較され日本の国情に合ったものに編纂された。

創立125周年記念サイトから一部をご紹介。
125年分のエピソードは、Webサイトへ。
→　http://chuo125.jp/

歴史で辿る

1885　1890　1900　1910

1898
学問の自由を主張した　長谷川如是閑（にょぜかん）

本名万次郎。この年卒業し、日本新聞社などを経て、1908年大阪朝日新聞社に入社。1918年の「白虹事件*1」により編集幹部だった如是閑は退職。翌年雑誌『我等』を創刊し、「森戸事件*2」では学問・研究の自由、大学の自治の主張を同誌上で展開した。その後も一貫して国家主義を批判し、自由主義思想に基づいた著作活動を続けた。大正デモクラシー期の代表的論客の一人である。1928年初めての普通選挙では、軍閥内閣による野党候補に対する妨害を、激しく批判している。戦後、私大出身初の文化勲章受賞者となる。1950年中大理事会顧問、中大白門ジャーナリストクラブ顧問就任。1969年没。享年95。

*1内乱を示唆する記事を掲載したとして政府から弾圧を受ける。

*2東京帝大助教授であった森戸辰男が、無政府主義者クロポトキンの研究によって起訴された事件。主任弁護士には花井卓蔵らがあたり如是閑もジャーナリズムの立場からこれを擁護した。

1905
中央大学に改称

中央大学の名称は日本学術の中枢となる意と、増島らが留学し、自由主義と英米法を学んだ英国ミドルテンプル*を重ね合わせたとされている。

*ロンドンにある法曹院の一つ。法曹院は法廷弁護士・裁判官の養成・認定機関。

1903
私財をなげうち中大を支えた　佐藤正之

1903年幹事に就任、卒業生として初めて大学の経営に携わる。東京法学院時代から中央大学の事業拡張の頃にかけ経営に腐心し、また財政難に陥ると自ら私財を投げうってこれを支えた。

1907
中大ジャーナリストの魁（さきがけ）　杉村楚人冠（そじんかん）

本名廣太郎。1907年推薦学員。新聞記者、随筆家・俳人。在日米公使館通訳を経て、東京朝日新聞に入社。トルストイが英国『タイムズ』に寄稿した日露戦争反戦論を全訳して掲載。朝日新聞「天声人語」の命名者でもある。

1917
岡野敬次郎

この年学長就任。同年、失火により校舎と図書館を焼失。これを乗り越え翌年には錦町再築校舎が竣工。また大学令が公布され、1919年の施行に向け名実共に中央大学にすべく尽力する。学者としては独法に基づく日本商法学の基礎を築いた。

1924
中大初の オリンピック選手

この年、オリンピックパリ大会が開催され、田代菊之助がマラソンに出場。田代は1927年第8回箱根駅伝10区で区間賞をとっている。

1926
箱根駅伝初優勝

中大は、この年の第7回大会で初優勝する。2010年現在、最多優勝(14回)、最多完全優勝(9回)、最多パーフェクト優勝【全区間1位】(6回)、最多往路優勝(15回)、最多出場(84回)の記録を誇る。

東京・箱根間往復大学駅伝競走スタート前(大正15年1月)

1944
戦地に赴く友に送る　惜別の歌

学生歌「惜別の歌」は、戦地に赴く学友を送る歌として唄われ、後も別れの歌として愛された。作曲者藤江英輔は回顧している。“入学した昭和19年暮から陸軍造兵廠に動員された。作業に明け暮れる中、友人中本は隣で働く女学生から、手書きの詩を受け取ったという。中本は戦争に対する自分の無力と「もうすぐ死ぬ」という力に支配される不条理を語りながら、その詩を見せた。島崎藤村の詩*であった。それは自分の中で旋律となった。間もなく仲間に召集令状が届き、何もなかった我々は皆でこれを唄った。やがて自分も中本もこの歌に送られ戦地へ赴いた。そして、中本はついに帰ってこなかった。(要約)”ぎりぎりの状況の中、若者たちのやるせない思いが、戦時の闇の中で交錯する。そんな中で生まれた歌である。

*島崎藤村の原詩は「友」ではなく「姉」であり、藤村が姉との別れを唄ったものである。藤江はこれを「友」に変えて「惜別の歌」とした。後にレコード化されるとき、藤江は藤村の子息を訪ねその諒承を得た。

中央大学

1920　1930　1940

1926
震災を乗り越えて　駿河台校舎完成

馬場愿治学長は、関東大震災後ただちに校舎を修復し授業を再開すると同時に、これを機会に、手狭になった錦町キャンパスを売却して、駿河台へ移転することを決めた。駿河台最初の校舎は1926年1月に着工、同年8月末に竣工し移転した。

1931
夜間学部開講

若い労働者が都市に集まり勉学意欲が高まる中、それに応えるため夜間学部を開設。1940年代末には学生数が国内最大規模になった。中大黎明期の熱気に始まり、勤労と勉学、質実剛健の精神を伴って成長した中大の精神的ルーツはこの夜間学部にあると言える。

1938
大戦の苦難を超えて　林頼三郎

東京法学院を1896年卒業。中央大学生え抜きの学長。また第二次世界大戦という最も不幸で困難な時代を背負った学長でもある。学者としては刑事訴訟法を専攻した。検事総長・大審院長・司法大臣の司法3長官を務め、東條英機内閣では枢密顧問官を務めた。1943年東條内閣が戦時に際し工学系を除く私学統廃合政策を打ち出した際、林はこれに反対し、私学結束によりこの危機を回避する。一方で中央工業専門学校を設立し、大学の存続のため奔走した。戦後、林は戦時中の役職のため公職・教職追放となるが、1952年総長に就任。その人生の最後まで母校の再建に努めた。1958年没。享年81。

1953
中央大学法曹会設立

この年、日本の法曹界を支える「中央大学法曹会」が学員会支部となる。原則として在京の法曹をもって組織する、中大法曹関係卒業者の会。会員数は4,000人を超える。歴代の日本法曹界の中核にも多くの人材を送り出し、講師やエクスターンシップ*等により、数々の支援を行っている。主な法曹著名人に、日弁連会長：岡弁良、大山菊治、荻山虎雄、今井忠男、堂野達也、阿部三郎。大審院判事：大場茂馬、林頼三郎、吉田久。最高裁判事はこれまでに12名が就任している（12ページに一覧を掲載）。ちなみに現在日本の法曹人口の約5分の1、弁護士の約4分の1が中央大学出身であり、そのネットワークは国内最大級である。

*法科大学院学生が、教育機関以外の法律事務所や官公庁、企業などで、一定期間実務の研修を積むこと。学部制の場合はインターンシップと呼ぶ。

1961
青年像「蒼穹*」完成

中央大学新聞が募集した学生歌に、一席で入選し*、賞金を得た岡本明久は、それを基金として中大生のシンボルを創ろうと呼びかけた。コンクリートに囲まれ、労働者のように行き交う学生達に、大量生産時代の世情を見た岡本は「力強く広い青空のような可能性を持った肖像」を、学友と共有したいと願ったからだ。これは反響を呼び、学生達が中心となり募金活動が始まった。募金は学生、教職員、学員にとどまらず、中大をめざしながら亡くなった受験生の母などにも及んだ。

*「蒼穹」は「弓なりの広々とした青空」を意味している。命名は制作者本郷新。

*学生歌「今こそ集いて」

1950
校歌「草のみどり」完成

戦後の復活と学生の成長を自然の生命力にたとえている。

1967
東都大学野球リーグ春季９年ぶり優勝

専修大戦のラストバッターを三振に打取り、球場は歓喜に沸いた。春季9年ぶり17回目の栄冠を、全チームに勝越す完全優勝で飾った。

1950　1960　1970

1959
箱根駅伝６連覇開始

第35回箱根駅伝で、3年ぶりの優勝を飾り、続く第36回から第40回まで優勝し、6連覇を達成。1947年からも6度の優勝があり、まさに黄金期であった。

1965
大学紛争

「学生会館紛争」「学費値上紛争」「常置委員会紛争」の3つからなる。端緒は、この年完成の学生会館の運営に、学生が参加できないことが不満となり、駿河台校舎がバリケード封鎖されて始まった。

オリンピックでの活躍〈1〉

1952年ヘルシンキ ── 白門初の金メダリスト　石井庄八

学員の石井は、レスリング男子フリースタイルバンタム級優勝。白門初であると同時に、戦後初の日本人金メダリストとなり、敗戦に打ちひしがれた国民を勇気づけた。

1956年メルボルン ── 現役学生がメダル獲得

レスリングで、学員の笹原正三と現役の池田三男が金メダルを獲得。中大レスリング部全盛期を作った。

1960年ローマ ── 水泳での活躍

水泳から2人のメダリスト（銀・銅）が現れた。またボクシングで銅メダルを獲得。中大生および学員は、計28名が参加した。

1964年東京 ── 選手、コーチ合わせて44名が参加

中大のスポーツ選手の活躍は、東京オリンピックで一つの頂点を成した。現役学生では、柔道・ボクシングで金メダル。他、数々の好成績を残した。学員ではレスリングの渡辺長武が金メダルを獲得し、また、男子陸上で戦後初のメダル（銅）を獲得した円谷幸吉（マラソン）も、東京オリンピックの記憶に残る選手である。

1968年メキシコ ── 学生メダル獲得

中大生３名がバレーボールで銀メダルを獲得した。また学員でも、レスリングで金メダルをはじめとして、バレーボールで銀メダル、サッカーで銅メダルの活躍。

1974
渋谷健一　理事長に就任

1974年に理事長、総長職務代行となる。在任中、文系4学部の多摩キャンパス移転、財政再建などに尽力。辞退された退職金・功労金により「中央大学創立百周年記念渋谷健一奨学基金」を設立した。十条製紙（現日本製紙）社長、経団連役員なども歴任。1997年没。享年91.

2002
世界最高水準の教育実現へ　「炎の塔」落成

「炎の塔」は、困難を乗り越えて世界を担う若者を世に送り出すための、シンボルとして建造された研究棟である。人類の未来を切り開く世界最高水準の研究をめざす若者たちが集い、熱くその未来を論じる姿を願う思いを込めて、全国学員の協力を得、125周年記念事業の一環として建設された。

2002
激動する時代に応えて　専門職大学院

専門職大学院は「現実の社会に対する実学」と「未来予測」に対応できる専門職を養成するため、現役社会人を対象として2002年、市ヶ谷キャンパスにアカウンティングスクール（国際会計研究科 ）、2004年にロースクール（法務研究科）、2008年には後楽園キャンパスに、ビジネススクール（戦略経営研究科）が相次いで設置された。

オリンピックでの活躍〈2〉

1988年ソウル ―― 学生銀メダル獲得

公開競技の野球では、中大生の笘篠賢治が銀メダルを獲得。この他、ボートの6名（うち現役学生2名）をはじめ、13名の選手をソウルに送り込んだ。

2000年シドニー ―― 活躍する水泳３人娘

水泳女子リレーは初の銅メダルに輝き、メンバーのうち田中雅美、中村真衣、源純夏の3人が中大現役生であった（中村は背泳ぎでも銀メダル）。他に中大からは野球の阿部慎之助をはじめ、水泳、フェンシング、陸上、ボート、自転車に計14名が参加。

1980　1990　2000　2010

1977
中大の新世紀の開幕　多摩校舎竣工

創立90周年の1975年、多摩校舎の建設を開始。駿河台キャンパスにおける、都市環境の悪化、インフレーションによる学生生活の圧迫、学生数の急激な増加による教育研究環境の改善のためである。1977年、21世紀にふさわしい大学をめざすという改革を託し、緑に恵まれた多摩校舎竣工。

1985
創立100周年

英吉利法律学校創設から100周年を迎えた。これに伴う事業として、思い出の地神田駿河台に、駿河台記念館が新たに建設され1988年に竣工した。

1980
駿河台校舎閉校

多摩キャンパスへの移転に伴い、この年大学会館を残して、半世紀の歴史を刻んだ神田駿河台の地から離れることになった。

1990
髙木友之助

就職活動に熱が入るあまり、学業を疎かにする学生に、中国の故事を例に「まず基礎を築け」と諭したとの逸話もある。和を重んじ、拙速を避け、少しずつ確かな人間形成をすることを望んだ。10年にわたり総長を務めるが、在任中の2000年没。享年78。

2000
モノレール開通

多摩キャンパスにモノレールが開通。駅がキャンパスに直結し通学の利便性は飛躍的に高まった。